

小泉八雲草稿・未刊行書簡拾遺集

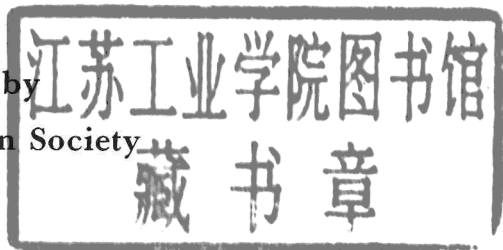
第1卷 草稿

八雲会編集

Gleanings of the Writings
of
Lafcadio Hearn

Vol. I. Manuscripts

ed. by
The Hearn Society



1990

雄松堂出版

略 歴

ぜにもとけん じ
銭本健二

昭和18年3月：島根県益田市生れ
昭和42年：広島大学大学院文学研究科修了
島根大学教授、八雲会会長
著書：「ラフカディオ・ハーン年譜」（共著）
Appendices to the Writings of Lafcadio Hearn 等

かじたにやすゆき かじたにひさし
梶谷泰之（本名：梶谷 延）

明治37年9月：松江市郊外八雲村生れ
昭和6年：東京帝国大学文学部英文学科卒
京都外国語大学名誉教授
八雲会を創立、前八雲会会長
著書・論文：「ラフカディオ・ハーンの松江時代における資料と考証」
「ヘルン先生生活記」「ヘルン百話」等

そめむらあや こ
染村絢子

1934年：東京生まれ
1957年：共立女子大学、文芸学部卒業

小泉八雲草稿・未刊行書簡拾遺集

第1巻 草 稿

1990年8月31日初版発行© 定価 12,360 円
(本体 12,000 円)

編 集 八雲会（代表：銭本健二）

解 説 梶谷泰之・染村絢子

発行者 新田満夫

発行所 株式会社 雄松堂出版

〒160 東京都新宿区三栄町 29

電話 03(943) 5791 振替 東京 5-162704

ISBN4-8419-0104-3 印刷：平文社 製本：博勝堂

目 次

序	iii
Introduction	ix
第1部 小泉八雲草稿の概要	
I 本書草稿の収蔵経緯	4
(1)松江・小泉八雲記念館収蔵の草稿	4
(2)松江市立図書館収蔵の草稿	7
II 原稿用紙	8
III 草稿の表と裏	11
IV 封筒	14
V タイトルの変更	16
VI 『怪談』と 	18
VII 作品の原典	20
VIII 本書草稿の執筆経緯	22
IX まとめ	28
第2部 小泉八雲作品の解題	
① 「日本の古い歌」(『影』)	33
② 「おしどり」(『怪談』)	36
③ 「鏡と鐘」(『怪談』)	48
④ 「食人鬼」(『怪談』)	74
⑤ 「青柳ものがたり」(『怪談』)	98
⑥ 「力ばか」(『怪談』)	114
⑦ 「蟻」(『怪談』)	125
⑧ 『神国日本』	182
⑨ 「化けものの歌」(『天の川綺譚』)	190
⑩ 「カズン ジェーン」	195
⑪ 「写真の話」	233
⑫ 「明治の唱歌」	252

⑬ 「10 葉の草稿」	272
⑭ 「耳なし芳一の話」(『怪談』)	298
⑮ 「性関係俗語隠語」	305
付表：本書草稿の初版本における対応か所	310

小泉八雲草稿解説

第1部 小泉八雲草稿の概要

はじめに

ラフカディオ・ハーン（1850—1904）が、アメリカから船で横浜に上陸してから、今年ちょうど100年目の記念すべき年である。ハーンは、来日以来、亡くなるまでの14年余、横浜—松江—熊本—神戸—東京、と居を移しながら、教師、ジャーナリスト、作家として活躍した。ここに収録する198葉（松江小泉八雲記念館収蔵のもの197葉、松江市立図書館収蔵のもの1葉）の自筆の草稿は、作家としてのハーンの創作活動の一面をのぞかせる貴重な資料である。

第1部では、これらの草稿を調べて分かるハーンの世界の制作過程における特記すべき事項を、数項に分けて記した。第2部では各草稿について、それぞれの解説を付した。

（注：MS p.とあるのはハーンが草稿に記した頁付けである。また〔 〕は本書収録の草稿の通し番号を示し、その中のvは草稿の裏を示している。）

I 本書草稿の収蔵経緯

(1) 松江・小泉八雲記念館収蔵の草稿(197葉)

ハーンの197葉の草稿は、島根県松江市の「小泉八雲記念館」に、2回に分けて収蔵されたものである。

第1回目は、昭和4年9月、草稿187葉と封筒6点が収蔵された。松江出身の岸清一博士が、ハーン没後、小泉セツ夫人から譲り受けたものを、松江八雲会に寄贈したものである。主な作品は『怪談』で、決定稿に近いものが多い。

第2回目は、昭和46年8月28日、封筒入りの草稿10葉が収蔵された。ハーンの三男、清氏の子息、小泉閨氏の寄贈である。すべて表裏に書かれた断片であり、作品は表裏ともに『怪談』が多い。

第1回目と第2回目について、少しく敷衍すると次の通りである。

第1回目

第1表

作 品 名		草稿枚数	備 考
①	『影』の「日本の古い歌」	1	断片。
②	『怪談』の「おしどり」	7	封筒あり。内1葉には裏にも書かれている。
③	〃 「鏡と鐘」	21	封筒あり。
④	〃 「食人鬼」	21	封筒あり。
⑤	〃 「青柳ものがたり」	6	断片。6葉とも裏にも書かれている。
⑥	〃 「力ばか」	8	封筒あり。
⑦	〃 「蟻」	54	初めの5葉は欠。

⑧	『神国日本』	4	断片。封筒あり。
⑨	『天の川綺譚』の「化けものの歌」	2	断片。
⑩	「カズン ジェーン」	32	自伝的遺稿。内 2 葉には裏にも書かれている。
⑪	「写真の話」	14	封筒あり。自伝的遺稿。
⑫	「明治の唱歌」	17	断片。未発表遺稿。

②③④⑥⑦⑩⑪の 7 編は、決定稿に近いものである。「決定稿」とは、ハーンが出版社へ渡した原稿をいう。この原稿には、編集者が書いたと思われる色鉛筆の数字などが書込まれていたり、印刷工の手についたインクがついている。(富山大学「ヘルン文庫」所蔵の『神国日本』の草稿は、決定稿である。)

「決定稿に近い草稿」とは、決定稿の前の段階のもので、決定稿と同様に大きな字で書かれ、ハーンが書いた草稿頁(以後 MS p.)や、行間指定があり、さらに原則として裏に書かれていないものである。ただ、決定稿とは違い、印刷の際のインクの跡や色鉛筆の記入がない。

ハーンは、決定稿を出版社に送るとき、輸送中に紛失するのをおそれ、万一の場合に備えて、決定稿に近い草稿を手許に保管していたものと思われる。

前記 7 編の決定稿に近い草稿には、作品のタイトルを、原稿用紙 1 枚に書いて表紙としたもの、脱稿年月日と思われる日付や、ハーンのサインが書かれたものもある。きれいな字で書かれ、訂正もほとんどない。はじめは、決定稿のつもりで書かれたようである。しかし、これらは決定稿ではない。

⑩⑪は、ハーン没後発見された自叙伝の遺稿である。

⑫の 17 葉は、記念館の分類では、「日本俗謡ローマ字写」とされている。しかし、これらは、明治時代の幼稚園、小学唱歌の類であるので、「明治の唱歌」とした。

表の作品名		裏の作品名
①	『異国情趣と回顧』の「禪の一間」	不明
②	『怪談』の「おしどり」	『怪談』の「蝶」
③	〃 〃	〃 〃
④	〃 「青柳ものがたり」	〃 「ろくろ首」
⑤	〃 「蝶」	〃 「蝶」
⑥	〃 〃	〃 〃
⑦	〃 〃	〃 「おしどり」
⑧	「写真の話」	〃 「ろくろ首」
⑨	〃	〃 〃
⑩	〃 と『怪談』の「ろくろ首」	〃 〃

この10葉は、記念館の説明では、「手がき原稿、日本の風俗など雑文の原稿、セツ夫人が残しておかれたもので、孫にあたる閨氏から寄贈された。」とされている。しかし、これらは、ほとんどが『怪談』の草稿であり、すべてが断片であるので、私は「10葉の草稿」としてまとめた。これら10葉は、すべて表裏に書かれている。どちらを表にするかは、意見の分かれるところであろうが、私は、原稿用紙自体の表裏とは関係なく、ハーンが、原稿用紙にさきに書いたと思われる、決定稿に近い、大きな字で書

かれている方を、表とした。表が不要となったものを裏返して、小さい字で書いた方を、裏とした。ハーンは、ほとんど原稿用紙の表から書いているので、原稿用紙の表と、私が表としたものは、ほとんど一致する。

（２） 松江市立図書館収蔵の草稿（１葉）

松江市立図書館収蔵の１葉は、昭和 62 年 11 月 24 日、ハーンの長男、一雄氏の子息、時氏からの寄贈で、『怪談』の「耳なし芳一の話」である。

II 原稿用紙

松江の「小泉八雲記念館」、奈良の「天理図書館」、富山の「ヘルン文庫」の草稿の大きさは、縦 20.3 cm、横 13.9 cm のものが多い。平均値としても 20.3×13.9 cm としてよいであろう。

私は、福井県今立町の和紙の研究家、梅田太士氏にご教示いただいたりなどして、ハーンが本書の草稿の用紙とした鳥の子は、越前今立の製造業者から、東京・日本橋の^{はいばら}榛原に納められたものとする。同氏によると、榛原に納入する以前に、越前で切って渡すこともあった。切り屋と呼ばれる紙を切る専門家が、紙切り包丁でまず耳を切り落とし、需要者の希望寸法に裁断した。当時、切り寸法の少々の不揃いは常であり、よく納入先の店から苦情があったとのことである。このようなことを前提とすれば、ハーンの用いた鳥の子紙の大きさの平均値は、縦 20.3 cm、横 13.9 cm として差し支えないであろう。

ハーンが使用した原稿用紙は、ハーンの長男、小泉一雄氏によると（『父小泉八雲』小山書店、昭和 25. 6. 15、pp. 215-6）、「父が日本で用いた原稿紙は、殆ど鳥ノ子紙であった。松江時代には洋罫及黄色の洋紙であったが、熊本以後は白色無罫の鳥ノ子を紙問屋から買った。東京へ来てからは、日本橋の榛原から一度に沢山買込んで置いた。」と述べている。ハーンは、アメリカ時代から、目によいといわれて、黄色い原稿用紙をよく使った。松江記念館には、アメリカ時代、黄色い原稿用紙に書かれた「クリオール フレンチ雑記帳」が所蔵されている。幸い、日本では、黄色味がかった鳥の子紙を使うことができた。

鳥の子については、かつて、小泉一雄氏と寿岳文章氏との間で、やりとりがあった。『父小泉八雲』において一雄氏が「…ハーンは鳥ノ子を使用した。これを雁皮紙と云っている人もあるが、鳥ノ子紙である」と述べたのに対し、寿岳氏は『風土』小泉八雲記念号（昭和 25. 9. 1）において「鳥の子は雁皮を主原料とするものだ」と反論した。これに対し小泉氏は、山陰新聞「^{さ こ ゆう べん}左顧右盼」（三）（昭和 29. 9. 27）において「…あれは純然たる雁皮紙ではないので、あれは鳥ノ子紙と云う方が正しいと立証したのに対し…」と述べている。しかし、これは紙の原料と商品名との認識の違いによるものと考えられる。

鳥の子の起源は、はっきりしないようであるが、平安時代初期には^{ひ し}斐紙といわれた。

文明年間（1469-86）に突然「越前鳥の子」の名が現われて、日本一の名声を博した。「この紙は肌なめらかで書きやすく、紙質引きしまっていて長く保存するによく、紙の王者と呼ぶにふさわしい紙である。」と『和漢三歳図会』に記されている（斉藤岩雄著『越前和紙のはなし』昭和48.5.1.越前和紙を愛する今立の会）。

越前鳥の子は、京都の御所用の特殊な紙として工夫された御所鳥の子に改良を加えたものとされている。明治の初め、西洋に負けない紙幣や公債証書を作るにあたり、越前から紙漉き職人が、大蔵省紙幣寮の抄紙局によばれて研究した。彼らは明治10年5月25日、紙の質、紙面の美しさ、耐久力といい、世界一のすばらしい紙（局紙）を発明した。この方法を越前に持ち帰り、「手漉改良紙」というものを、明治18年2月、加藤覚太郎氏が作り出した。外にも、西野弥平次氏が、できるだけ原価を安くするため、山野に自生する千草や茅、笹等、いろいろ安くて豊富にある自然の原料で立派な紙を漉いた、とも記されている。私は、ハーンの原稿用紙を持参して、梅田太士氏に鑑定していただいた。氏によると、これは、西野弥平次氏が漉いたようなもので（越前には外に多くの紙漉きの人がいた）、和紙の味をもっていて、インクがにじまず、ペン先きがひっかからないものが、時代の要求としてあったので、その要求に添うために作られたもので、溜漉の手漉改良鳥の子である。当時、榛原と越前とは取引があり、かならず手漉の紙を要求された。これに応じて供給したのが、越前改良鳥の子紙である、と言われた。このことから、局紙は公の立場からの名称であり、改良鳥の子は、公に協力した越前が生み出した製品名であるといえよう。したがって、榛原もハーンの要求に対して、当然のこととして「鳥の子」の名称で売ったのであろう。

ハーンの原稿用紙をよく調べると、裏に網目がみえる。古い作品に使われた原稿用紙ほどははっきりみえる。このことについて、さらに梅田氏にお尋ねした。氏は、「改良鳥の子は局紙の技法を発展させたもので、手漉きであるため厚さが一定でなく、金網の枠で紙料を漉きあげる手法であるため、紙の片方の面に網目が残る。乾燥のあと、紙面を滑らかにするための垂鉛板ローラーで圧をかける。しかし、手作業のため、その日の圧力の強弱で、網目がはっきり出たり出なかったりするが、次第に技術が向上し、網目が見えにくくなったものだ」と言われた。私は、島根大学図書館蔵の、ハーン自筆書簡の紙質を調べたが、すでに松江時代から、鳥の子紙を使っていたようである。これを、東京時代の鳥の子紙と比較すると、大きさは、ほぼ同じであるが、裏の網目が、かなりはっきりみえたり、紙の厚さが、極端に薄いものが多い。

ハーンは 1890 年 8 月、横浜から松江に教師として赴任すると、一時滞在した富田屋旅館で早速執筆活動を開始した。桑原羊次郎著『松江に於ける八雲の私生活』（山陰新報社、昭和 25. 6. 1）によると、この旅館でも、また、結婚後の北堀町の家でも、毎日沢山でた不要となった草稿は、反古として皆捨てられたり、風呂の焚きつけにされてしまった（同前 p.22, p.42）。松江時代の決定稿以前の草稿は、日本ではまだ発見されていない。熊本時代、神戸時代のものが見当たらないのも、やはり、捨てられてしまったからであろう。これに対し、受信者が大切に保管しておいた松江、熊本、神戸時代の書簡は、島根大学図書館等でみることができる。神戸から東京へ転居後、榛原から購入した鳥の子紙を原稿用紙として使い始めると、ハーンは、原稿用紙の裏にも書いたが、これも不要となると、二つ折りにしたり、くしゃくしゃにして紙屑かごに捨てた。これを焼くように言われたセツ夫人は、勿体ないと、しわをのばしてとっておいた。まとめて右端に二つ穴をあけてとじ、家計簿代わりに使ったものもある。ハーンがインクで書いた上から、墨で書いた。ハーンのペンの跡も、セツ夫人の筆の跡も美しい。越前改良鳥の子紙は「和紙であって和紙でない、洋紙であって洋紙でない」（『越前和紙のはなし』 p.212）といわれたが、インクと墨になじむ越前改良鳥の子が、ハーンの草稿を残してくれたのかもしれない。

III 草稿の表と裏

ハーンはいつ作品のインスピレーションが湧いてくるか分からないので、散歩に行くときでも小ノートを持参した。散歩の途中で見た珍しいもの等も書きつけてゆく。旅行をするときも同様で、小さなノートに大きな字で、絵入りの走り書きをする（松江・小泉八雲記念館所蔵の「旅行ノート」）。家でセツ夫人から、作品の原話となる話を聞くときは、小ノートのほか、子供が学校で使うザラ紙のノートにも書く。東大の講師時代、講義の休み時間に、いわゆる三四郎池のほとりで休んでいたとき、書いたと思われる小ノートもある（松江、小泉八雲記念館蔵「東大講義メモ帳」）。あるときは単語であり、またあるときは長い文章になる。

このようにして書かれた初稿は、表に書いたが不要となった原稿用紙の裏に書く。ここでも推敲を重ねる。自らの構想が作品として纏まったとき、ハーンは鳥の子の新しい原稿用紙に書く。スペンセリアンペンの機能をフルに発揮して、ハーン独特の強弱のはっきりした、リズムカルな字体で書きつけてゆく。これは、セツ夫人が榛原から買ってきて、表を上にして、机上に重ねて揃えておいてあったものであろう。

以上のように、ハーンの草稿には、表裏両面に書かれたものがある。表と裏とでは、それぞれが特徴を有している。したがって、両者の違いや関係を記して、ハーンの商品の生成の跡を辿るための一助としたい。

(1) 表と裏とでは、書かれた文字の大きさが違う。表には大きな字で美しく、一字一字丁寧に書かれている。裏の字は全く逆で、読みにくい。すでに、大谷正信氏（『英文学研究』11巻1号、日本英文学会編、昭和6.1、「Hearn先生の“Ants”の草稿」pp.1-15）や河原畑正行氏（「ラフガディオ・ハーンの草稿」『日本文化』4巻9号、天理図書館、昭和12.2、pp.55-65）が指摘しているが、表は1行に4～5語で、17～8行、裏は、1行に8語前後で、32～3行も書かれており、多いものでは280語近くも書かれている。

(2) 裏では略語の使用が、しばしば見られる。表では全く見られない。単語の頭文字だけ、あるいは、これに1～2字続けた自分だけの略語である。例えば本書の裏に書かれた「おしどり」[194 v]では、morningはm.、AkanumaはAまたはAk.などである。

(3) 表には、作品ごとに1枚ずつ、上部中央に、その順番を示すナンバー（MS p.）

が、数字で小さく書かれているのがほとんどである。裏にはほとんど書かれていない。

(4) 表に書き損じた場合は、たとえ一行しか書いていない場合でも書くことをやめ、別の新しい原稿用紙に改めて書いてゆく。同じところから書き直したものが数枚あるものもある。

(5) 表では、文字の加筆訂正はほとんど見られない。ごくまれに見られるが、訂正の場合には、訂正したい文字を小刀できれいに削って書き直しており、加筆の場合は鉛筆で書いている。裏では加筆訂正が多い。インクで大きく線を引いて抹消したり、? のマークも見られる。

(6) 表には、印刷に際してのハーン自筆の行間指定がある。#>は1行、2lds>は2行、# $\frac{1}{2}$ line>は $\frac{1}{2}$ 行あけるの意である。ld. は lead の略語である。裏にはまったく書かれていない。

(7) 裏は表に対して上下逆方向から書かれているものが多い。手前から向う側へ向けて裏返す欧米人の感覚によるものであろう。したがって、表裏に書かれたものは、上下逆方向となる。

(8) 裏を使った作品は、一枚ずつ上から裏返して書いたのではなく、纏めて表の全部を逆方向に裏返して書いている。したがって、それぞれ表裏同じ枚数にできあがった作品があるとするならば、裏の第一頁は、表の最終頁となる。

(9) 表と裏の作品の関係は、同一作品、あるいは、同じ著作の中に載った作品同士のものが多い。そうでない場合でも、前後して発行された本の中の作品同士である。

(10) 同じ作品で、決定稿に近いものと、初稿に近いもの、つまり表と裏が両方とも纏った形で残っているものはない、と考えられてきた。しかし、短編の「おしどり」は、その両方が1組ずつ揃っている。表6葉、裏3葉あり、裏の1葉(富山大「ヘルン文庫」蔵)以外は、松江・小泉八雲記念館に所蔵されている。

以上のことから推定すると、ハーンは、表は常に清書のつもりで書く。したがって字も大きくきれいで加筆訂正もない。書き損じるとその頁は、別の原稿用紙に書き直す。つねに印刷のことを考えて、印刷に際しての行間指定をする。出来上ると、ハーン独特の終わりのマークを入れる。Lafcadio Hearn のサイン、Tokyō, Japan や、脱稿年月日を書く場合もある。この草稿を簞笥にしまっておいて、取り出しては、推敲を重ねた。出版社へ送った決定稿の、一つ前の草稿は、その紛失をおそれて、封筒に入れておいたのであろう。